

1 人生に効く古典文学（四）俳諧的生活のすすめ

2 ●今日の「人生に効く」処方箋 俳諧的生活のすすめ

3

4 **松尾芭蕉**寛永二一（1644）年〜元禄七（1694）（三代：家光〜五代：綱吉）

5 古池や 蛙飛びこむ 水の音

6 『三冊子（土芳）』より

7 「自他分別」から「自他通い合う世界」に

8

9 ●「風雅の誠」

10 師の風雅に万代不易あり、一時の変化あり。この二つにきはまり、その本一つなり。

11 その一といふは**風雅の誠**なり。

12 不易をしらざればまことに知れるにあらず。不易といふは新古によらず、変化流行にもかかはらず、誠によく立たる姿なり。【略】

13 また、千変万化するものは、自然の理なり。変化にうつらざれば風あらたまらず。是に推移らずと云は、一端の流行に口質時を得たる計にて、その誠をせめざる故也。せめず心をこらざるもの、誠の変化を知ると計云事なし。唯人にあやかりて行のみ也。

14 せむるものはその地に足をすへがたく、一步自然に進む理也。行く末いく千変万化するとも、誠の変化は皆師の俳諧也。**かりにも古人の涎（よだれ）をなむる事なかれ**。四時の推移如く物あらたまる。皆かくのごとしとも云り。

20

21 ●「風雅のたね」

22 師のいはく「乾坤の変は風雅のたね也」といへり。

23

24 ●「習ふ」と「習ふ」

25 松の事は松に習へ。竹の事は竹に習へと師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也。…習へといふは、物に入（いり）てその微の頭（あらは）れて情感（かんず）るや、句と成所也。

27

28 ●発句は俳句ではない

29 連句とは

30

「俳諧は三十六歩の歩みなり、一步もしりぞくこと無し」

31

歌仙・半歌仙 発句、脇句、第三句…挙句「序破急」

32

33 市中は物のにほひや夏の月 凡兆

34

あつしあつしと門々の声 芭蕉

35

(略)

36

さまさまに品かはりたる恋をして 凡兆

37

浮世の果ては皆小町なり 芭蕉

38

何ゆゑぞ粥すすするにも涙ぐみ 去来

39

(略)

『猿蓑』より

40

●五月雨をあつめて早し 最上川

〈初折表六句〉

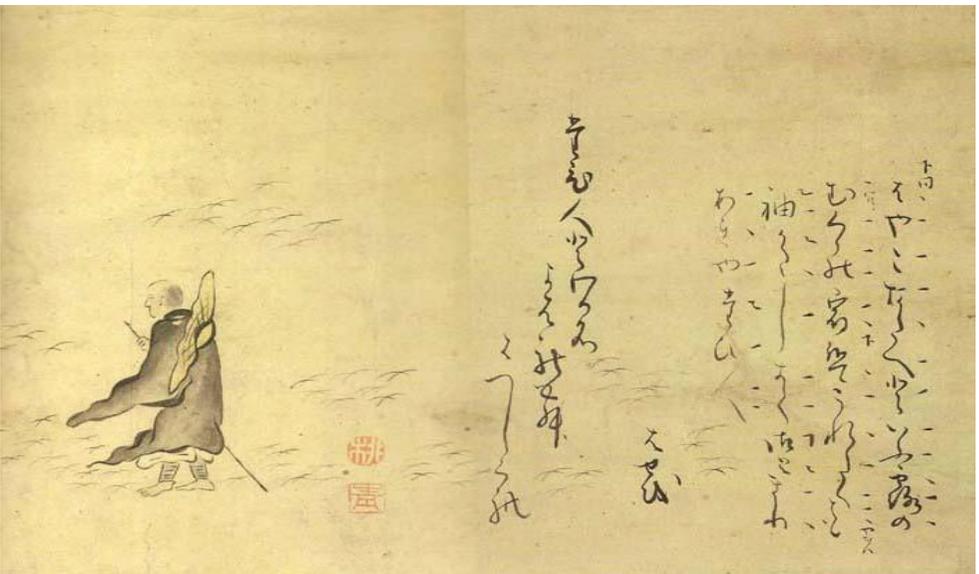
1 五月雨をあつめて涼し最上川 翁
 2 岸にほたるをつなぐ舟杭 一栄
 3 瓜畠いざよふ空に影待て ソラ
 4 里をむかひに桑の細道 川水
 5 うしの子に心慰む夕間暮 一栄
 6 水雲重しふところの吟 翁
 7
 8
 9
 10 〈初折裏十二句〉略

●『おくのほそ道』の特殊性

- 11
- 12 ・写本による流布だということ
- 13 ・芭蕉と能…能は俳諧の源氏 其角

※「源氏読まぬ歌詠みは遺恨のことなり」(藤原俊成)

14
15
16



17

下
 同
 はやこなたへといふ露の
 むぐらの宿はうれたくとも
 袖かたしきて御とまり
 あれやたびびと

はせを (芭蕉)

たび人とわが名
 よばれむ
 はつしぐれ

桃 青

18
19

「那須」

- 1
2 那須の黒ばねと云所に、知人あれば、是より野越にかゝりて、
3 直道をゆかんとす。遙かに一村を見かけて、行に、雨降。日
4 暮る。農夫の家に、一夜をかりて、明れば。又、野中を行く。
5 そこに、野飼の馬あり。草刈おのこに、なげきよれば、野夫と
6 いへども、さすがに、情しらぬには非ず。
7 「いかゞすべきや。されども此野は、縦横にわかれて、うゐう
8 ゐ敷旅人の、道ふみたがえん、あやしう侍れば、此馬のとど
9 まる所にて馬を返し給へ」と、かし侍ぬ。
10 ちいさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。 独 小姫に
11 て、名を「かさね」と云。 聞なれぬ名の、やさしかりければ、
12
13 かさねとは 八重撫子の 名成べし 曾良
14
15 頓、人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て、馬を返しぬ。
16
17
18
19

横井也有『鶉衣』

元禄一五（1702）年～天明三年（1783）年（五代：綱吉～十代：家治）

「螻翁伝」

3 螻（けら）といふ虫は、

4 よく飛べども家を過ぐる事あたはず。

5 よくのぼれども木を窮る事あたはず。

6 よくおよげども谷を渡る事あたはず。

7 よく穴ほれども掩ふ事あたはず。

8 よく走れども人を免るる事あたはず。

9 是をかれが**五能ありて一ツをもなさず**とはいへりどぞ。

10

11 ここに翁あり、

12 詩つくれども詩ならず、

13 歌よめども歌に似ず、

14 物かけどもよからず、

15 絵かけどもつたなく、

16 俳諧すれども下手なり。

17

18 我かの虫におとらめやとて、みづから**螻翁（ろうおう）**ぞ名のりける。

19 やや老いになり、

20 今はかかる身のほどをしりて、

21 他にほめられむ事をねがはず、

22 人の謗（そしり）をいとはず。

23 さらに何にか腹たてて、かのつぐみといふ鳥によろこばるべき。

24 よしたゞ**かれは腹たつべくとも、我は笑はむと思へる**なりけり。

25

- 1 五七 賛補破茶碗辞（破れ茶碗を補うの辞を賛す）
- 2 大極（たいきよく）の氣二つに破れて陰陽となる、
- 3 その陰陽の又あふからに、夫婦いもせの契（ちぎり）ともなれり。おもしろし、
- 4 此（この）茶碗のまどかに、望月（もちづき）の隈（くま）なきのみかはと、
- 5 一たびわれて有明の盈虚（えいきよ）を示し、
- 6 会者（ゑしや）定離（じやうり）を打かへして、
- 7 離れたるものゝ又あふたるぞ、仏も我（が）を折り給ふべき。
- 8 嚮（さき）に此（この）事に文あらむ事を我に求む。我（われ）田（でん）先生が
- 9 言にきけり、騏（き）は壯（さかん）なる時一日に千里をはしる、老いては驚馬（ど
- 10 ば）も先だつとか。まして驚馬の老いたるもの、何のいふ事をかしらむ。そもそも是
- 11 （これ）より北にあたつて護花関（ごくわくわん）あり。そこに一人の好事（かうず）
- 12 あり、かしこに乞うて求むべし。あなかしこ、うたがふ事なかれ。只たのめたのめと
- 13 あらたに告げて、我は火燧（こたつ）の山にかくれぬ。
- 14 かくてかしこに其（その）文成れり。始（はじめ）の茶碗のあやまちに懲りて、い
- 15 かにもそつと敲（たた）いて見るに、果して金玉（きんぎよく）の響（ひびき）あり。
- 16 噫（ああ）此（この）茶碗のわれずば此文あらじを、あざ丸の太刀（たち）・蟬折（せ
- 17 みをれ）の笛も、その瑕（きず）ありて瑕ならず、継目をいたむ事なかるべし。嫦娥
- 18 （じやうが）が天上の薬はいさしらず、人間に石うるしといふものなからむや。
- 19 はなれたら継げはなれたらつげ幾度（いくたび）も
- 20 破（や）れ世中（よのなか）にあらむかぎりは

21 ※シテ「ただ頼め。しめぢが原の。さしも草」地謡「我世の中に。あらん限りは」

22

23

24

25

1 三十 物忘翁伝

- 2 わすれ草生ふる住よしのあたりに住みわびたる物わすれの翁あり。
- 3 さるは健忘などいへる病の筋にはあらで、只身のおろかに生れつきて、物覚えのお
- 4 ろそかなるにぞありける。
- 5 昔は経学の道をも問ひきき、作文(さくもん)和歌の席などにも、さそふ人あれば
- 6 まじらひけれど、きく事習ふ事のさすがに面白しと思ふ物から、夕べに覚えしことご
- 7 とも、朝ぼらけにはこぎ行舟の跡なくて、身にも心にもこの事すくなし。
- 8 されば是を書付置かむと、しゐて硯ならし机によれば、春の日はてふ鳥に心うかれ
- 9 て過ぎ、秋の夜は虫なきていとねぶたし。
- 10 かくてぞ老會(おいそ)の森の草、かりそめの人のやくそくも、小指を結び手のひ
- 11 らにしるしても、行水の数かくは力なき、人もわらひても罪ゆるしつべし。
- 12 さればその翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きに数まへられしほどは、
- 13 人やりならずはづかしかりしが、つんぼうの雷にさはがず、座当の蛇におどろかざる
- 14 「**「うばれ幸**」なきにもあらず。
- 15 よのつねききわたる茶のみがたりもはじめ聞きける事の耳にのこらねば、世に板が
- 16 くしといふ咄ありて、またかの例の大坂の陣かと、若き人々は突ききしろひて、小便
- 17 にもたつが中にも、我は何がし僧正のほととぎすならねど、きくたびにめづらしけれ
- 18 **ば、げ**にときくかひある翁かなと、かたる人は心ゆきても思ふべし。
- 19 ましてつねづね手馴れ古(ふる)せし文章物がたりの双紙も、去年(こぞ)見しこ
- 20 とはことし覚えず、春よみしふみは秋たどたどしく、又もくりかへしみる時は、只あ
- 21 らたなる文にむかふ心地して、あかず幾たびも面白ければ、**わづか両三帙の書籍あり**
- 22 **て、心のたのしみさらに尽くる事なし。**
- 23 むかし炎天に腹をさらしたるおのこは、人にもおりおり物をとはれて、とりまがは
- 24 し言ひたがへじと、いかにかしましき心かしけん。今は中々うれしき物わすれかなと
- 25 ぞうひける。

1 猶かの翁が家の集に、何の本歌をかとりけるならむ、
2 わすれてはうちなげかるる夕べかなと

3 物覚えよき人はよみしか

4
5 十八 夢の弁

6 節分の夜の宝舟に一年の幸を待つより、一富士二鷹の品定も、これらは和朝のなら
7 はしにて、唐人の耳には日本人の寝言なるべし。

8 されば夢の得失を思ふに、かの邯鄲の枕はあまり古ければさらにはず。蝶となり
9 て漆園にたはぶれ、蟻にひかれて槐国にあそぶ(南柯太守伝)。かしこき雲の上人は、

10 ★うば玉の夜の衣をかへしては、銀(かね) いらすの恋をもたくむらん。

11 あるはかつらぎの神にもかぎらず、昼は見しらぬ神々も、七日満ずるあけがたの枕
12 上(まくらかみ) にはまみえさせ給ふなる。

13 かかるたつとき夢の告げを、仏はいかなれば例の世をはかなみて、夢幻泡影のたと
14 へごとより、人は現(うつつ) も夢の部に入れて、世の中をいとふまでこそうたてけ
15 れ。

16 とても夢現のおなじものならば、夢を現にかぞへ入れて、起きてたのしみ寝てたの
17 しまば、五十年の月日をわたるも、百年の算用にはあふべきをや。

18 鬼神に横道なし、傾城にまことなし、聖人に夢なしとは、いつの世に誰が定めた
19 るぞ。鬼神は聞いてよろこび、傾城は聞いて腹だつらむも、聖人ばかりは何とも思
20 しめさず。さるは冷(ひえ) にも熱にもならねば、どちらでもよしとの御(ご)ころこそ
21 世にありがたけれ。

22 ★いとせめて恋しき時はうばたまの夜の衣を返してぞ着る(小野小町)

23

24

●朝寝 ●八百八 ●借り物